号し兵法を修る事師を求め法をさそなる
とおもふとなん天爵遍るへうしに木刀をもてお敵
兎角う戸を洗頭しさてしに敵をうへしに他国を
人と二人して対ハ婦しかうに世のなへを敵へうし
を敵くうを蓋を兎角こを遍て絶ゆりく通安人
う中ゆて寵をやとうを寵をとれ南ゆ老一人江戸
へ行をしと定め小熊寵を取帝りて江戸をさ
てゆりうゆの敵ハ玉を爲り時日を極さと麻酒
の神を清てて敵書をこあなゆ
敵白敵書を絶麻酒大の神酒宝前

右ゆうて乃敵ハ其ちを流く助兵法の師匠
信器一羽亡灵を敵対の才子を根絶兎角と名
付ひ老師の員を儀を以て弟ちんとす今武敗
江戸を高く私世をもこかひ逆賊と振い年号
を後て彼を対人為其のお才子岩戸小熊江戸へ
沈糸しうり師孔くハ弟力をちりをう西也ひを
んぬをおかてハ二人兵法乃威力をいて見中國中
を動をし南社彼換を遠立しをうへし若小熊
利を先ををおひてハ其又う通也を雄雄を決をへ
しをふ乃其まくるふをてハ生て南社へ坂東

し神前にて後十文字に切てうちをとり出し
血をもて神社をしるしとなしてその血を
とゞめて来る永初南社の庭を茅野と可
千乃栖となしてこれを毛以私歌に詠
ら人師乃良を謝せんがなりいそう神内の出雲
こゝに出をけるうんぬん如件

文禄二年癸巳九月吉日　　ちゑ泥し助

と書てこれを宝殿に納めて宅に帰りぬ扨又小熊八
江戸へ来て月に絶てをさをる熊に小熊江戸へ
来りて色黒く髪八尺のごと

ほうこを厚く生ずる肉ちり眼をうめ死
若年おのへうの小熊なりこれ老兎角の事とへさく
せをして清水乃大師大指のりと小先礼をとる
を熊八会津をもて人をくよりあをてハをに化
勝負を決し師匠の約を定むへし文禄二年
癸巳九月十又日日午刻岩乃小熊と書て兎
角の弟子数百人ありこれをもて庭門をうれ
乃立板に天下に隠なし兎角江戸におくらるを
初て立きりうをもてうの先礼をお刻て接小
熊をへ寄合て接ゆをて数せく創をあるを

兒角突て五人女乃出来て大ゝ〳〵小熊なる
ものゝ一歩小我打教し法人ゝ〳〵ん〳〵と敬云
しは生物百〳〵仕紙をゆゝ上刈大搗へ女人出て
活生物所搗の女方小弓絵を拾て聖国し女人
乃刀振搗を取りゆひぬ扱女人搗乃東西へ出る兒
角ハ大筋の小熊ゝ西とゆめうちゆきうりえう西
とえん白布をもりてたゝようけ足ゝ〳〵ゆきうん
ちとゝさ木力を六角小ゆゝくかゝゝ作り換ゆて
筋ゝ〳〵とゝさゝ一面ゝ小脇をゝへ是を搗い扱せゝ我
少て出る小熊ハ前ゝ乃木綿一拾ゝ淺黄の木綿

袴を弟是まをゝゝ足かゝる姿ゆて黄ゝ木力
と拾出る女方ゝり進ゝ是て打女乃木力ゝゝと打
あい互ゝ押ゝゆゝみへしゝ小熊兒角を搗きゝ〳〵押
付行是を取てさうたまゝ〳〵ゆへ〳〵て落しゝ小
熊ハとまゝを上ゝまゝゝ上ゝ〳〵ゝ仕度の仕合ゝ出合ゝ
ゆゝと皆人ゝゝゝせり兒角ハ西迎前の姿ゆてそれゝり
迎電ゝ小熊ハ天下ゝ名を揚ゝり五老男拾せ
り大人聚集方性ゝみゝりゝり待方ゝゝしのひ
ゝゝハ出ゝゝの戦ひとゝゝゝゝ木力を取ゝ抜女方
ゝゝとゝてゝゝ打合ゝゝ仕也女人搗ゝの右力を

初めて切りかの太刀ハ刃と知る迄なり若し総国
青砥と塚原ト伯と云ふ法者なりう是帝代の名
人来代よりたひてト伯ら一つの太刀といふ迄なりて
是ハ太刀の名極くまれと雖ども今ハ一刀也
知る迄なり但一刀と知りいなと雖ども刃
分乃信より刃なし兎角小熊を名人なる小
信ず国乃孫乃すえ人なを刃迄なる方の太刀
中ふくくくと南てを本刀ハ迄なるを奇
特なり勝負の者ひ一方乃一方まくくて

運命乃尊落ようなる迄と兎角指
あくへ押付る迄川へおくれ小熊ハ勇力おとり
うる所なりしとも是ハ実ハ岩沢右京助と云
人是を実て言我なの間ハかくり指ける
て勝負を従ハ足人なり小熊ハとく来て西ちり
出兎角ハ来ちり西向ハ来ハ我を所ハ言ふ山を
指ちと云老士ちう是を見て来勝負なさ
以ふを兎角まけうくと二度中迄なてと
不実ハおりひを指書云を勝ハ是を指ち
云々ハ小熊右ハ本刀を抜て頭を抜あけい

小兒角と云事とく仍兒角されいと云て
ゆう動をと拾うち見まて云る下の下あるられさ
四手上兒角は御へ向て奴をぬりいて稽古を
云ん見運命乃至前表や能へ兒角へ大男
乃大力ゆう友よ小熊をあるとりて兵一おとと
腹よ抜へうり小熊へ小男ゆて力なる心を切者
うう友おおして叶へうとと仰ゆよ接と兵し
下腹よ持業れ如く兒角一おとうつをよ小熊
ううと結とあ兒角を搦きへ押付ら搦あ
勝うりてうれへ兒角川へさらにまよ蔵へう

ゆへて兒角張力をたのみとう見形のを通を且
きまへを威ゆて守けし見血氣乃富と云
て中をよわうを小熊へ項王ういをんう弦
良う謀を名とう敵強くおこれうと我いをて
を柳の枝よ書れ立うう変動をを四
敵よ周て物化をと云る三畏のうを小熊う
会法ゆて拾ひ面立うとやれ
月夜熊忠日根岩ゆう稽員の事を背を義
乃強し小熊へ小男兒角へ大男ゆりう根岩う
さよ至て小熊を搦へへ押付て働うせ見危く

尺ばかりなる小刀を以て指
下へ落して振指を振て八幡を祈すと言葉
を呼りて案千とさるに古刀法四磨三丁月年
四月の大火事おもて性よありしをみくりと云又
以後貞と
東照宮御出馬ありて是日小隆又代紀八小
紙兜角を指さしへ押
付て御ひとりて敵人の勢とお遣ひ給ふ
先此と決しくくしとへとと敵人乃紙可今之へ

塚原卜傳

塚原卜傳者常州塚原人也父塚原土佐守從飯篠
長威齋得天眞正傳而其子新左衛門雖爲繼刀槍

術而不幸蚤死於此弟卜傳繼兄之傳脉而修行於
諸州大顯其名此時野州有上泉伊勢守者陰流之
祖刀槍之達人也卜傳則赴野州謁上泉究心要後
到平安城下謁將軍義輝公及義昭公奉授刀槍之
術凡列侯諸士從卜傳習其術者若干勢州國司具
教卿特爲傑出故授一太刀松岡兵庫助者悟本旨
妙後以其術奉拜
東照宮嘗奉授一之太刀
東照宮甚褒賞甲頭刑部少輔多田右馬助等繼松
岡傳木滝治部少輔相續甲頭之術野口織部得木

瀧傳間宮所左衛門受多田傳永尾庄右衛門繼間
宮之脉絡榊原七右衛門政勝者從永尾得其宗間
宮永尾榊原者共仕
大猷大君在幕下

甲陽軍鑑曰信玄公御くらんハ兵法修行仕ル大勢
三をとくらへさせのりて三足ひも上下八十人斗ならて
生かりさる兵法修行いたして諸侍大小共ニ兵法を
やうに仕なれハけらくらん扨兵法の名人あまた出
同信玄公曰塚原卜傳と云兵術の上手儀出て
御名人也子細ハ此卜傳太刀ハ前に一ツの太刀と

名付る也此太刀をつかひ出者ハ私なり彼家臣之法
者康勝者其代ニ被合ニ於ハ合ける者大三度あれ
なる名乃首乃首数廿又並此追首七十六二度の
首後者ニ於ハ給ける首者の儀也卜傳も弟子九人居る
名乃首廿一を内於て下此首或ハ陽中此首七
度及て戦変之乃者也右一の太刀をつかひ納候
しそ五丈一卜傳ハ一此太刀と日本中国都と
被るに御方へお傳信る院ニ公方義教院殿御子
光源院殿義陽院殿此二代へ中上候也右の太刀
ニ一ツ乃位一ツの太刀一ツ太刀如新太刀一ツを

三段ノ足分ル者一ハ天乃時宜二ハ地乃利天地ヲ
合ル之乃也者三ハ人乃和ト云ハ一ノ右乃長ハ人の和ト云
文の仍也ト雖上ノ三ハ共ハ法つりひよ仕おと云掛て
乃仕相の仕ト云ふ事ハ極我眞貫の者ハ右
若法人乃教授ハ右乃仕おと勝利ヲ得法様ヲ
学ヒ又ハ人ハ右乃極勝利ハ右ノ必定作ヲ
て利ヲ得ル事ハ定方ハ右乃作
多勝負ハ利ヲ得ルトモ法無也無用ト十度ノ
及度ヲ重ル十度乃内ハ右乃作多ハ
ハ右繰リて勝負ヲ為ル者ノト雖の負ノ也ノ

ト雖モ事敗ヲ成ル事ハ仕合ノ仕ルト雖仕合ノ勝利
疑乃おの多の類ヲ以裏屋ヲ打ヲ事ヲ以ト雖
勝利也ハ雖多ノ全一ノ右乃作ハ勝ノ名人
乃為ニおの多ヲ上ル者也ハ来名人ノ多ハ
斗也云々

勢州軍記曰夫兵法劔術近来常陸國住人飯篠
入道長威齋受天眞之傳立一流ト傳者續長威
之四傳ヲ兼秘術新復立其流得名世間者也然
ト傳諸國修行而歸常州最後之取欲立其家嘗
爲察二子之心以木枕置暖簾之上先召嫡子以

見越之術見付之取其木枕而入座也又如前而
召二男二男開帝時木枕落飛去懸手於刀幟而
入座也亦如前而召三男開暖簾之時木枕落忽
拔刀斬之於中而入座也ト傳怒曰汝等見木枕
驚何乎感嫡子彦四郎兼知之不動心而謂家督
曰但一太刀唯授一人也我傳之於伊勢國司被
往習之遂死畢其後塚原彦四郎上勢州問國司
曰我父相傳之一太刀欲見其相違也具教不知
諫而見之云云
或書曰昔智有人ノ謂ルハ土佐ノト傳ト云モノ

ヲリ兵法ヲ一流立テ無手勝流ト号ス或時東
國ヘ下レル折節江州矢走ノ渡ニ著テ一葉ノ
扁舟ヲ借テ乗合六七人有シカ其中ニ三十七
八程ニ見ヘタル男アリ長高ク髪黒ニシテ言
ヒイカツナリ船中ニテ唯一人ロヲタヽキ別
ニ人モナケニ慮外至極ナル體ニテ天下ニ敵
手ナキヤウニ兵法ノ自滿ヲスルト傳初ハシ
ラス顔ニテ打眠リテ居タリシカ是モ又勇々
シキ嗚呼ノ者ナレハ彼男ニ向テ云ケルハサ
テモ種々樣々ノ御物語ヲ承ルモノ哉其中ニ

兵法ノ抗言コソ心得ヌ支ナレ我等モ若年ノ時ヨリカタノコトク精ヲ出シテ稽古シタレトモ今迄人ニ勝ントハ思ハス只人ニ負ヌヤウニ工夫スル外更ニ他支ナシトイヘハ男聞テ御坊ハヤサシキ兵法ハ何流ソト問ハイヤタタ人ニマケヌ無手勝ナリト答フ男ノ云ク無手勝ナラハ御坊ノ腰ノ兩刀ハ何ノ爲ソト傳聞テ以心傳心ノ二刀ハ我滿ノ鋒ヲ切惡念ノ萠ヲ斷トイヘハ男聞テサラハ御坊ト仕合ヲイタサンニ手無シテ勝タマハンヤト傳カ曰

サレハ我カ心ノ劍ハ活人劍ナレ𪜈對スル人惡人ナレハ其儘殺人刀トナル男腹ニスヘカ子テ船頭ニ向テ云ケルハ此舟ヲ急キヲレ着ヨ陸ニアカリテ勝負ヲ決セント怒リケレハト傳潛ニ目ヲ以乘合船頭ニ相圖シテ云ケルハ陸ハ往還ノ巷ニテ見物コトクシアノ辛崎ノ向ナル離嶋ニテ人ニ負ヌ無手勝ヲ見參ニ入ン今日乘合ノ御不請ニ各モ急キノ旅行ニテアランスレトモアレマテヲサセテ御見物アレカシトテ船ヲ頻リニヲサセテサテ彼嶋